

第7課 アッシリア人の敗北

【暗唱聖句】

「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ。あなただけが地上のすべての王国の神であり、あなたこそ天と地をお造りになった方です。」イザヤ 37:16

【日曜日・付帯条件】

ユダの国は、アハズ王が死に息子のヒゼキヤ王が引き継ぎますが、シリアと北イスラエルの連合国と戦うために助けを仰いだアッシリアに対して、今も貢物を治めなければならぬ状況は続いており、国としての独立性を失っていました。ところが、紀元前 705 年にアッシリアのサルゴン 2 世が死に、センナケリブに交代すると、ヒゼキヤはこれを好機ととらえ、いくつかの小さな国を束ねて、アッシリアに対して反旗をひるがえすのです。しかし、アッシリアの力は衰えておらず、逆に返り討ちに会ってしまいます。

イザヤ 36:1 に「ヒゼキヤ王の治世第十四年に、アッシリアの王センナケリブが攻め上り、ユダの砦の町をことごとく占領した」と記載されていますが、これと全く同じ言葉が、Ⅱ列王記 18 章 13 節にも記されています。その後、Ⅱ列王記 18 章 14～16 節によると、ヒゼキヤはセンナケリブに対して、「私は罪を犯しました…あなたが私に課せられるものは何でも負います」と言って誤り、アッシリヤから銀三百タラントと金三十タラントを支払う羽目になります。そして、宮と王宮の宝物倉（ほうもっこ）にある銀を全部渡した上、金で覆った主の神殿の扉と柱を切り取って渡したのです。この出来事は、センナケリブの年代記にも記されています。これは聖書の記述と世界史の記述が一致して確認できる数少ない例として、注目されている箇所でもあります。

イザヤ書 36 章 1 節と 2 節との間には、12～13 年の年月が経過しており、この間、ヒゼキヤは全土に対して偶像をすべて取り除くよう命じ、主に燔祭をささげ、宗教的大改革を行います。そして、センナケリブが再び侵略しようとしていることがわかると、それに備えて要塞を強化し、町の外にある泉の水をせき止め、民たちを「主がついておられるから恐れてはならない」と鼓舞するのです。これは神様を悲しませるものをすべて取り除く霊的大改革を行ったゆえに、確信をもって言える言葉でした。

【月曜日・宣伝工作】

センナケリブはユダに侵攻すると、ラキシユを包囲し、自分はそのとどまって、部下のラブ・シャケに大軍をつけてエルサレムを包囲させました。ラブ・シャケは布さらしの野への大路にある上の池の水道のそばに呼び出し、ヒゼキヤの 3 名の代表に、アッシリヤの王に反逆して、何に拠り頼もうとしているのかと脅迫してきます。エジプトは頼りにならないし、聖なる高台にあった祭壇を取り除いてしまったので、主が助け出してくれるはずもない。神はアッシリアに味方しているのだ。他の国々の神々も我々から救うことができなかつたように、お前たちの神も救うことはできないと主張したのです。ユダの高官はラブ・シャケの声が城壁の上にいる民に聞こえないように、アラム語で話してほしいと頼みましたが、ラブ・シャケはいっそう大きな声で語るのです。ラブ・シャケが語ったことの多くは事実でした。ゆえに説得力がありました。これは民の心を王であるヒゼキヤから離反させ、恐怖によって心をくじこうとする宣伝工作だったのです。

しかし、「人々は黙っており、彼に一言も答えなかつた」とあります。これはヒゼキヤの命令でもあったのですが、王と民がこの危機に際して一枚岩になっていたことがわかります。この王と民とのゆるぎない信頼関係は、一朝一夕にして築かれたものではありません。ヒゼキヤ王と民は共に悔い改め、霊的改革を行い、過越の祭を行い、そして罪から離れて主に立ち返る奨励の一つひとつの積み重ねによって築かれてきたのです。教会の一致を考える時、同じことが言えるのではないのでしょうか。

【火曜日・揺り動かされるが、捨てられない】

ヒゼキヤはラブ・シャケの言葉を聞いて、自ら衣を裂き、荒布を身にまとって主の宮に入り、イザヤのもとに人

を遣わし、祈ってほしいと嘆願します。イザヤは使いの者にこう言います。

『主なる神はこう言われる。あなたは、アッシリアの王の従者たちがわたしを冒瀆する言葉を聞いても、恐れてはならない。見よ、わたしは彼の中に霊を送り、彼がうわさを聞いて自分の地に引き返すようにする。彼はその地で剣にかけられて倒される。』 イザヤ 37:6, 7

イザヤが告げたポイントは、「恐れてはならない」ということと、「主が戦われる」ということの2点でした。センナケリブは、イザヤが預言した通り、クシュの王ティルハカが、「アッシリアの戦いを交えようと軍を進めている」（イザヤ 37:9）との知らせを受け、一時的にひるみます。しかし、それで諦めたわけではありませんでした。なおもヒゼキヤを脅迫するのです。すると、ヒゼキヤは自ら神に祈りを始めるのでした。そこには、かつてのようにエジプトにより頼もうとしたり、センナケリブに貢物を贈って、自らの命を救おうとしたヒゼキヤの姿はありませんでした。ヒゼキヤは「あなただけが地上のすべての王国の神であり、あなたこそ天と地をお造りになった方です」と祈りました。センナケリブの攻撃は、エルサレムへの攻撃だけでなく、その背後に真の神への信仰に対する攻撃だったのです。

【水曜日・物語の続き】

ヒゼキヤの祈りに主は答えて下さり、イザヤを通して「わたしはこの都を守り抜いて救う／わたし自らのために、わが僕ダビデのために。」（イザヤ 37:35）と語られました。そして、これは「万軍の主の熱情がこれを成就される。」（37:32）と語られています。万軍の主の熱情は、民に対する愛です。37章36節を見ると、「主の御使いが現れ、アッシリアの陣営で十八万五千人を撃った。朝早く起きてみると、彼らは皆死体となっていた」と書かれています。いったい何が起きたのかは誰にも分かりません。ヘロドトスによれば、ペストが発生したのではないかとはいいますが、まるで突然死のように、朝には大勢の兵士たちは息絶えていたのです。その後、センナケリブは撤退を余儀なくされ、自国でなんと二人の息子から殺されてしまいます。

【木曜日・病と富】

38章1節に、「そのころ、ヒゼキヤは死の病にかかった」とあります。そのころとはいつのことでしょうか。直訳は「それらの日々に」となります。つまり、時間的には過去に戻ってしまうのですが、センナケリブとの問題が発生した最中でということ。ヒゼキヤの病気は、イザヤが訪ねて来て、「主はこう言われる。『あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家族に遺言をしなさい』』」と言うほどの状態でした。なぜ、このような病気を主はおゆるしになったのでしょうか。ヒゼキヤが神に頼らずセンナケリブに貢物を送ったことに対する裁きという見方もありますが、むしろ主がヒゼキヤに死を宣告することで、彼が神に必至に助けを求めるためではないかと考えられます。実際に、ヒゼキヤは涙を流しながら主の助けを祈ったのです。すると、主は祈りを聞いて下さり、寿命を15年伸ばしてくださり、目の前に迫っていたアッシリアとの問題に対して、「アッシリアの王の手からあなたとこの都を救い出す。わたしはこの都を守り抜く。」（38:6）との約束までいただくのです。そして、主はこの約束が確かであるしるしを与えられます。それは日時計の時間を10度戻すという、目に見えるしるしでした。時間が戻るということは、地球の自転が逆に進むということです。あり得ないことでした。まさに、神が生きているしるしでした。父アハズはしるしを求めませんでした。そして、人を頼りとしました。そのつけを、息子のヒゼキヤが払わされているのですが、父アハズとは異なり、神様の力によって問題を解決して行くのでした。